

2017年11月26日<聖霊降臨後第25主日礼拝> 飯川雅孝 牧師

招詞：ルカ6章46-48節

聖書：コヘレトの言葉12章1-14節

説教 『人生の秋に』

1. 人生への問いかけ

11月も最後の週になりました。晩秋の季節に皆さまは何を心に浮かべるでしょうか。この教会にも来られたM先生が牧師としてまだ30歳を出た頃、学生のわたしと並んで歩きながら、ご自分の教会を思い浮かべて「クリスチャンのお年寄りには輝いていますよ。」と語り、また、キャンプファイヤーで八ヶ岳山麓に行った時、「このキャンプファイヤーの薪のように人生を精一杯燃焼させるように生きたいですね。」と語った言葉が思い出されます。あれから50年以上経った今、そのまとめの時になったと感じます。この言葉にひかれて ヘルマン・ホイヴェルス（1890-1977）の著した『人生の秋に』を読んでみました。神父はコヘレトの手紙を紐解きます。このコヘレトは混濁のこの世を達観している感じがします。この世との戦いに入って行かない。血と汗と涙を流す生き方をしない。なぜこのような思想が生まれたか。ユダヤ民族は、紀元前587年に国が亡んだ後、神に背いたことを反省する中で信仰を復活させました。しかし、その後約200年、紀元前4世紀から、あの有名なアレキサンダー大王がペルシャ帝国を破って弱小のユダヤもその支配下に置きますと、その文化の影響の下、華やかで、お金を中心とするこの世的な価値観に翻弄されます。神に従って真面目に生きても苦しむのはなぜだ。どうせ世の中は、金持ちや、権力のあるものが上に立つ、人の世はかけひきや、強い者に媚び、要領よく生きる方が楽で得だ。そうであれば、神に従う厳しい生き方はどうでもよい。若い人は特にそういう影響を受けます。でも、そこまで近づいて、若者をユダヤの信仰にとどめようとしたのがこのコヘレトの書です。今日の箇所も「青年時代を楽しく過ごせ。」しかし、やがては自分の身動きもできない時が間違いなく来る。すべての時を通じてあなたを見守っておられる神に対して、死ぬ時は自己責任を果たすことが求められるという真理を気づかせようとしております。

2. ホイヴェルス神父の生き方はコヘレトにあるニヒルな生き方に抗った真摯な生き方の証。

ホイヴェルス神父は79歳の時書いた本書の冒頭で「自分は神の真理に立って人生を歩んで来ました。だから、人生の秋を迎えて、日本のみなさんになにかよいものを残したい。それは心に刻まれた信仰です。それはことばとして示さる磨かれた宝石、光輝くダイヤモンドです。わたしは神様に与えられた信仰を残して行きたい。」との思いを語ります。神父は現実の混濁の世でコヘレトの書にあるニヒルに陥った人とは逆に、神の恵みに包まれて真摯に喜びに満ちた生き方を証しております。

神父はドイツで生まれ、19歳でイエズス会に入会し、1923年、大正12年33歳の時来日し、長らく上智大学の学長はじめ他大学で教鞭を取り、神父として教会に奉仕しながら、執筆活動もこなし、日本の教育文化のために多大な尽力をされ方です。羊飼いの家に生まれ、幼子がキリストのゆりかごに包まれるように恵みの中で生まれ、来日前にはドイツで日本文学も学んだという事ですから、日本には殊の外理解が深い人でした。わたしはこの書に書かれた神父の言葉に、来日後は神父として、キリスト教の種を蒔かれながら、その心には日本人に宿る心にキリストの愛の目を通して暖かいまなざしを向けられていることをひしひしと感じています。「異文化交流」と言いますが、わたしたち日本人には気付かない平常

の日常生活や文化、歴史の中に驚くほどの着眼点を持って評価し、その良さをわたしたち日本人に、また世界に紹介してくれた恩人として映ります。昭和の一桁の時代からまだ日本人が取り立てて作品や劇にすることがなかった豊臣秀吉によって磔の刑に処された長崎の殉教の『26聖人』や、戦国の武将、細川忠興の妻『細川ガラシャ』はダンテの永遠の女神ベトリチェやジャンヌ・ダルクなどと並んで、本来世界的な女性であるのにまだ世界に知られていないと言って、死に臨んだ時の強い信仰などの劇作を映画や劇で表現しています。それは戦後、オペラや歌舞伎でも上演せられ、人々を感動させています。

また、ニヒルに物事を見ると、人の小さな親切とか思いやりに無頓着になってしまいます。神父はそれとは反対に、われわれ日本人ならおよそ気が付かないことやところに、ご自身の信仰の心をもって暖かい目でとらえている。ここでは、多くの中から原文の感触を損なわないように、神父の言葉でそのまま、二つ紹介しましょう。

○日本に来た直後関東大震災に遭い、岡山県の小田村の仮の教会の薬局に行った時

家の前に立ってもすぐ中に入れませんでした。その理由は、道で一人の婦人が、向こうの二階の窓に腰を掛けているおじいさんに挨拶をしている。40年来、あれほど楽しい、完全に日本的な挨拶を見たことがありません。二人は、かわるがわる相互いに完全なリズムをもって、頭を下げ、手を丁寧に膝の上におき、どちらも早まって頭を下げたり、遅れてあげないように注意して、そうしてとてもやさしいことばを、相互いに差し上げ差し上げしながら、長い丁寧なあいさつを続けるのでした。神父がこのような日本人のしぐさに心を奪われたのは、誠実な日本人に見た互いの真心への敬意を自身の信仰から共感したのでしょう。それを見終わって家に入り、ミサを捧げ終わると、食事をごちそうしてもらいました。日本式正座は来日前に訓練したので慣れていましたが、正座をしながら、丁寧なもてなしを受けたので15分くらいの食事が30分以上も掛かり、やっとの思いで立ち上がるとその場にどっと倒れてしまいました。奥様はびっくりして、両手を畳みの上につき、「ごめんください、ごめんください、私が悪うございました」とあやまる。わたしは「大丈夫、なんでもありません。」と膝を正して立ち上がると、布団を敷き、背が高いので、さらに子どものふとんを足して、私はしばらく休みました。もてなした婦人の真心は忘れられないものとなりました。その3ヶ月後、この婦人は3歳の女の子を残して天に召されましたが、20年後23歳になったその娘さんと東京でお母さんと懐かしい思いで話をしたという事です。

○人間のもつ喜びは心のもっとも深い奥底にあると言います。この喜びは人の顔に表れます。神父はその一つの例を夏の電車の海水浴帰りに腰かけて眠っている人々の中に見ました。競争社会であくせくする顔にはありません。若いひと年よりも、母親の膝の上の幼い子供たちも皆、その顔は一日中過ごしてきた海岸の太陽に焼かれ、非常に美しく、きれいな色艶をしていました。それは赤とかブロンズ色に、まだそれほど黒くなく、同時にこの顔色は大変な幸福な気持ちを表していました。まさに、真実この世の傑作が、と私は考えました。それは、四つの大きなものの協力によって描かれたものでした。何よりもまず**海**です。大きな海。地球で一番大きなもの。また海の水には、特別なクスリが入っています。それから**風**。風によって海は波立ち、ひとはこの動く海とあかずに遊びたわむれ、生気をとりもどし健康になります。

三番目にあげられるものは、一番にかぞえてもよい**太陽**です。太陽の光線で、ひとの青白い顔色は元気で健康そうなブロンズ色に変わります。

四番目は、**海岸の砂**です。特に、子供たちにとって、この砂は最上の遊び相手なのです。子どもと砂。街かどのどこかで行為があり、トラックで砂が運ばれてくると、花にとんでくる蜜バチのように、もうさっそく子どもたちがとんで集まってきます。こどもたちは、この砂にまみれて夏の暑い盛りに、人々が一日でも、こうして神のおおいなるものと共に遊ぶならば、とひとの生涯と健康のために、どんなにより効き目を表すことでしょう、ほどよく疲れ、目を閉じたひとたち顔、子の顔からどうして、厳しい表情をして怒り争うことなどが考えられるでしょう。職業も地位もない眠ったときの人間は、一番平和なときの人間でありましょう。

神父ご自身も戦争の時、教会に信徒が誰一人いなくなってしまう経験がされておりまし、職業も職場も何回も変わりましたから、おそらく人間社会の波にもまれたはずです。そのような経験をされているからこそ、平和が取り戻された時、花鳥風月の穏やかな日本の風土、ここでは海や風や太陽や海岸の砂の自然に調和した本来の日本人ののどけさをこの海水浴帰りの心地よい疲れの中に覚えたのでしょう。

○そして、人生最後の時に移ります。週報に最上の業について紹介しておきました。

最上のわざ（下記は44年ぶりにドイツに帰国した際、友人から贈られた詩）

この世の最上のわざは何？

楽しい心で年をとり、

働きたいけれども休み、

しゃべりたいけれども黙り、

失望しそうなときに希望し、

従順に、平静に、おのれの十字架をになう。

若者が元気いっぱい神の道をあゆむのを見ても、ねたまず、

人のために働くよりも、けんきょに人の世話になり、

弱って、もはや人のために役だたずとも、親切で柔和であること。

老いの重荷は神の賜物。

古びた心に、これで最後のみがきをかける。まことのふるさとへ行くために

おのれをこの世につなぐくさを少しずつはずしていくのは、真にえらい仕事。

こうして何もできなくなれば、それをけんそんに承諾するのだ。

神は最後にいちばんよい仕事を残してくださる。それは祈りだ。

手は何もできない。けれども最後まで合掌できる。

愛するすべての人のうえに、神の恵みを求めるために。

すべてをなし終えたら、臨終の床に神の声をきくだろう。

「来よ、わが友よ、われなんじを見捨てじ」と。

神父は自分の人生で神への責任をすべて果たされた。もう思いの残すことはない。この詩は神が約束通り、天国で自分を迎えて下さるといふ安堵感をわたしたちに伝えております。